

リバーフロント整備センター設立20周年記念座談会 「川とまちづくり」



出席者

岸井 隆幸 日本大学理工学部土木工学科教授
関 克己 国土交通省河川局治水課長
堂本 泰章 埼玉県生態系保護協会事務局長
水野 雅光 国土交通省中国地方整備局
太田川河川事務所長
宮村 忠 関東学院大学工学部
土木工学科教授

(司会)

児玉 好史 (財)リバーフロント整備センター
研究第一部次長

(本稿は、平成19年7月25日に座談会を行ない、紙上スペースの関係で、編集部責任により編集したものです。)

【児玉】 本日は、リバフロが設置されたときの大きな柱でございましたスーパー堤防、あるいは川とまちづくりという視点でこの座談会をセットさせていただきました。この20年で、いろいろな意味で社会も変わってきております。リバフロが社会の状況に合わせながら、どのような役割を果たしてきたのか。今後さらに先に向けてどういうことを考えていけばいいのか。いろいろご助言、アドバイス等いた

できれば大変ありがたいと思っています。どうぞよろしく願いいたします。

この20年をふり返って

【児玉】 まずは、スーパー堤防や越谷レイクタウンなど川と密接に関係するまちづくりに関わってこられた岸井さんから、この20年をふり返って、お感じになられていることをお話してください。

【岸井】 私はリバフロが設立されたころ、越谷市に勤務していました。前々から懸案だったレイクタウンを市長が是非実現したいとおっしゃるので、「では、考えましょう」というのが本格的な河川とのお付き合いの最初かもしれないですね。レイクタウンもようやくまち開きが近づいてきていますが、やはりこうした大プロジェクトは20年かかるな、という印象を改めて持っています。

今の河川行政はそのころと比べると、かなり柔軟になった気がします。あのころは、計画はあっても見せないという感じで「やる時に見せるから待っていてください」とか言われて、調整に行ってもけんもほろろだった記憶があります。しかし、実は計画は持っているけれどもそれがどうもできそうもない計画で、それじゃ話にならない、一つでもできれ

ばいいじゃないか、そんな話をしに行った記憶があります。

その後、河川法の大改正があって、河川も随分変わったなというのが、その10年後ぐらいですかね。同時に、河川行政の中に「環境」、「参加」というキーワードが入ったと



岸井日本大学理工学部土木工学科教授

いうことで、随分振り子がそちら側へ行っちゃった。ある意味で「みんなで決める」なんていうのは幻想に近いので、ほんとうに大丈夫なのかと思っていました。だから今も、もう少し主体的にリードしてもいいのではないかなとも思っています。「参加」それ自身は悪いことではないですが、まだまだ当初から残っている課題が実は解決していないですから。

スーパー堤防についても随分議論させていただきました。当時から「できるところしかできない」というのはわかっていたのですけれども、お金の面が非常に厳しくなってきた、少し引いていった感じもありますよね。波が変動しているのだろうなというのがこの20年間の印象です。

ただ、昔の河川行政に比べると確実に柔軟になったし、こういうセンターがいろいろ情報を流していることも皆さんよく知っています。そういう意味でこの20年間、リバフロというのは、河川行政の大きな流れを着実に具体化する非常に大きな役割を果たしてこられたのではないかと評価しています。

【宮村】 10年前の座談会で「2010年のまちづくりと川づくり」というテーマの中で、三井不動産の林さんがウオーターフロントのはしりとして、1979年ごろに始めていた大川端計画について話しています。ちょうどそのころ私が隅田川を何とかしようということで船上ゼミを始めたり、寒中水泳をやったりというようなことがあって、リバフロ10年のときも紹介されました。僕のは30年くらい前の話になっちゃっているんですね。

川の行政も随分変わったような、基本的にはそんなに変わっていないような、むしろ3年、4年という単位で見ると、えらい変わるなという感じがするんです。あと、岸井さんと同じように、そろそろコントロールしたほうがいいんじゃないのという一方で、何もかも管理するってそんなに言っちゃって大丈夫かなというような、不安感を近年持っているという現状です。

【堂本】 先ほどレイクタウンの話をされました

が、私反対していたんです。越谷市の環境審議委員をやっていたんですけども、当時の市長さんに「何で一級農地つぶして、あそこに人口2万、3万も持つてくる必要があるんですか。」と。休耕地と違ってすごい自然環境あるんですね。遊水機能もあるんだから残してもらえないか。よっぽど駅前を再開発したほうが将来にとっていいんじゃないですかって話をしていたんですけども、そのうち任期が切れましたので。

その後もせめて調節池のつくり方は地域のもともとあったはんらん原の環境というのを意識した空間づくりができないかという話をしたんですが、相変わらずゾーニングとか、何か足して割るみたいな形で提示されて、20年前と全く変わらないなという感覚は僕らサイドからはあります。場所によってそこにいる方々の思いとか、言うべきことは言う方、遠慮して言わない方、がいますよね。それで時間だけはかかって、結論を出さずに先送りということで、お互い不信感が残るだけというのは相変わらずあるのかな。レイクタウンはほんとうにそういう意味では非常に心残りなんです。



越谷レイクタウン

出典：UR都市機構HP

【岸井】 レイクタウンは基本的には治水の施設です。この地域の治水はどうなっているかと言うと、上流にいくつも水たまりをつくる絵は書いてあるけれども、実際には誰も動いていないから絶対できっこない。下流の越谷はしょっちゅう水に浸かっていたわけで、ほったらかされているのはかなわないから自ら事業を起こしてためる池をつくりましょう、となったわけです。最初は利水の議論もありましたが、結局、治水の池となり、そして治水事業だけでは実現できないので、東になった事業としてやり出したというのが実態だと思います。

【宮村】 僕は越谷の利水の計画があったとしたら、ものすごく賛成なんだけどね。もともと埼玉の平野というのは、レイクタウンが利水だとすれば、そういうものを次々とつくることによって、利根川の右岸側の治水も結果的にはコントロールしてきた

場所なんです。あそこに近代的な利水施設ができれば、いろいろな面で役に立って、そういう面では惜しかった。

【関】 そういう意味では、レイクタウンはまちと川と水を考えてという意味でわかりやすい事例になるのではないのでしょうか。というのは、川とまちを切り離したらそれぞれが成り立ちませんし、いっしょにした場合、どこかに水を集中的に貯めないと、どこもが水に浸かる構造になります。まちと水に関するさまざまな課題を歴史的にいろいろな解き方で解いてきたわけです。最近の典型的な解き方の一つがレイクタウンだと考えております。

【宮村】 さっきの話で恐縮ですけど、この10年で林さんという人が大川端計画でやっと緩傾斜堤防ができて、まちづくりができなかったと書いてあるんですね。船着場がくれなかったとあります。そのころはテラスも流量が減っちゃうと言われてくれなかった。それが最近になったらつくり始めて、何か目玉みたいに言ってるけど、下手だなという感じですね。使っていない。

【水野】 広島は川とまちづくりをずいぶん前からやっているところが2地区あって、昔はすごく進んでいた。今はどうかと言われると下を向くところがありますが、幾つかふり返りつつご紹介いたします。

まず、下流デルタ部。「水の都広島」という構想を進めています。川沿いにきれいな護岸があって、きれいな木々があります。原爆が落ちて、全部まちが焼かれバラックが建ったときに、このまちを何とかしようと思ったときに、これだけ川が多い、川沿いに緑をつくって、いいまちをつくらうということでスタートしているので、全体的に非常に緑が多い。

特に川づくりが先導的なのは、昭和58年に完成した基町環境護岸。今から25年前に「環境」というのを全国ここしかやっていない。あと、平成7年に完成した原爆ドームの前の親水テラス、灯籠流し等に活用されています。全世界に川の風景が映される川です。ところで基町環境護岸は、市民と管理協定を結んで草刈りもしてもらってます。草刈りかわりに、好きなことをやっていいよと言ったら、この前、川べりにスクリーンをつくって映画の試写会をやりました。「夕風の街桜の国」という映画ですけれども、この基町環境護岸のところのお話で、この場所で撮影されて、この場で上映する。撮影にあたっては市民団体が草刈りをして、一生懸命撮影に協力するというようなことで、川を愛する市民団体が育ってきていて、非常に川とまちづくりが進んでいるところです。太田川はなぜそういうことをできたかですが、昭和42年に放水路が完成したことによって市内派川

が昔のままで残せたことによります。

もう一つの全国に先駆けた川まちづくりが、下流部にある古川です。昭和44年に太田川本川からの分派点を締め切りました。締め切り後の川づくりを工夫していて、水に親しめる、水遊びができる川づくりをしています。これを昭和49年から昭和56年にやっているということで、太田川の下流部・広島はかわまちづくりを全国に最初にやったところなんです。

あと環境用水の話をしめすと、お堀の浄化も広島市と共同で平成元年から5年間やっています。環境用水導入も全国初です。とにかく川とまちを一体化でつくるというのは先導的にやってきました。ただ、残念なことに昔はハード対策を一生懸命やってましたが、最近はお金がないので、ソフト施策ばかりになっています。河川区域にカフェテラスをつくるという話をやっています。川に関心のある市民は育ってきているんですけども、ハード対策に市がついてこれない。



元安川と原爆ドーム

たとえば、市民球場が移転しますが、球場跡地をどうするかが議論になっており、地元からはにぎわいのあるものという話があり、私たちが川と一体化の整備をしてほしかったんですけども、どっちかという完全に分離した計画になってしまうということで、かわまちづくりとしては先導的なところも最近は少し寂しいなというような思いがしております。結局、あそこは国有地なんで、にぎわいづくりで商売するなら買えと言われてしまうので、あそこだけで公園整備することになる。非常に残念です。

【関】 平成5年から平成7年の3年間リバーフロント整備センターの当時の二部次長として勤務しましたが、そのころ、今日のテーマは川とまちづくりですが、当時の話で記憶にあるのが、「まち」ってどう考えるのか。きょうは平仮名ですね。平仮名の他に「町」と、「街」と、「タウン」があります。その違いは何であろうか。例えばふるさとの川で対象とするまちはどういう「まち」なんだろうという議論を何

時間もやった記憶があります。その中で一つ記憶があるのは、たしかマイタウン・マイリバーの紫川と堀川についての議論です。どうもその当時の状況でよくないのは「タウン」だろうと。なぜならば、マイタウンの対象の川は水質が悪く船に乗るなんてとんでもなく、川沿いのまちの状況も悪く歩けない、歩けてもそんな気にもならない状態でした。非現実的な夢を描くのもいかなものかという気持ちがある一方で、何かしないといけない、そんな思いで取り組んだ時代でした。

それが最近現地に行ってみると、本当に信じられないですよ。堀川も船に乗ろうという人が大勢来て、あの汚かった堀川の上の船の中で天ぷらを食べるとい時代になっています。15年というのは長くて短い時間です。まちと川を考えると時間の可能性にもっと期待していいのではないかと考えております。



堀川

川づくりの評価をもう少し長い目で

【宮村】 ちょっと悪乗りするとか、河川法改正をみんなが改正と言い過ぎている。大体法律ができて世の中変わるなんてことはなくて、世の中の常識になってきたら法律になるんです。それが河川法だったというだけでね。川の環境問題について行政の人は苦労してやってきたわけです。名目が見つからないから苦労しながら無理してやるわけじゃない。それがある程度みんながやり始めたから改正になったわけでしょう。



宮村 関東学院大学工学部土木工学科教授

ところが、つけ加えられたと言われると、そうじゃないんだよって。治水のときだって、最初にあるのは利水なんです。それでやっていたら土地が高度化しちゃって治水をやらざるを得なくなったけど、名目がなかったのを、河川法をつくって名目をつけてやってきた。戦後は地盤沈下対策として水資源をやらざるを得ないじゃないかというのも、これも世の中一般になってきてやる。ところが、何かそのところがちょっと次の時代に需要がなくなったとか何とかということだけのために悪者みたいになっちゃう。新しいものがいつもいいよなんていうのはどうもバランスを欠いている。今、せっかく3つが遠慮なくとれる時代になったんだから、それこそ総合的にやってほしいな。

【関】 多自然型川づくりが始まったから、あるいは河川法を改正したから治水利水に環境を加えた河川の管理や整備になったというのは正確ではないと思います。こうした取り組みを進めていた河川、地域があり、これを全国的に広く展開していこうと進めようということだと理解した方がいいと思っています。一つの例として長野県の木崎湖から流れ出ている農具川です。昭和54年か55年頃だったと思います。河川改修に当たりほとんど木材と玉石で木工沈床とか落差工をつくっていった例で、現在もその姿を残しています。これは当時の大半の河川改修からみれば、ある種異端だったと思います。そういう例が全国に幾つもあって、その地域だけで進んでいた取組をリバフロ等が全国に紹介していった。こんないいものがあるんだから、それぞれの河川、地域で工夫しましょうよと発信した。それとあわせてそこにいるキーパーソンを全国に紹介していった。実は川づくりの例とそこにいる人の発信によりネットワークを形成していった時代でもあると思います。

キーパーソンといえ、3人の大事なキーパーソンがおられます。関正和さんと石崎正和さん、それから森清和さんです。3人とも「和」という字がついておられ、関正和さんはリバフロの初代、他のお二人は当時リバフロが本当にお世話になりました。この方々のところには本当に多くの人、広い分野の人が集まるんです。川とまちのテーマは様々な分野に関わります。いろいろな分野の人が集まり、そこで川とまちの問題を解く方向が議論される、そして解決に向かっていくというんでしょうか。残念ながら3人とも早く亡くなられてしまって、ほんとうに残念です。石崎さんは川とまちづくりの仕事のパイオニアだったと思います。広範なネットワークを持っている人がまだまだ少ない時代で、石崎さんに頼まないと進まないというような状況がありました。

川とまちづくりを進めるには、人とそのネットワークが存在することが大事な条件だと思います。リパフロは人とネットワークづくりも大事な役割としてこれまで進めてきたと思います。宮村先生にしかられましたね。みんなで石崎さんに頼ったために、本当に休む暇もないくらい忙しい状況になり、それで石崎さんの寿命が短くなったのではないかと。

【宮村】 ただ、不思議なことに、忙しいほどいいアイデアが出るんだよね。そういうのと忙し過ぎて取り残されちゃう部分ってあるんです。例えば、いたち川というのはほんとうにいいのかな、僕なんか時々思います。横浜の川で石を使うのは、川の本来の技術としてはおかしい。埼玉は石を使うところなんだけれども、埼玉の荒川の川べり、低水敷のところというのは、浸食する川なものですから木枠を縦に入れたものです。それを今は横に入れている。やっぱりちょっとした技術も伝承されないで、単に木ならいいとなると、余計おかしくなる。50年代の横浜の川、60年代は本当に石をよく小さい川で使いましたが、これはやっぱり邪道だと思う。というような議論をもうちょっとやってほしい。

荒川なんて80年たつけれども、一番川らしくなってきた。みんなもうちょっとゆっくり見て、あまり遠慮せずに、そこのところの評価をもう1回ちゃんとやる。そこのところをまちづくりで見てほしい。特にまちの変化はここのところ激しいじゃないですか。

例えば、私は隅田川のところへ住んでいるけれども、隅田川のまちは劇的にバブルのとき変わっちゃったんです。それでそのころテラスができたんです。あのテラス、何だろうと思っても、できたものは使ってやろうというのが我々のスタンスなんです。でも、使おうと思っても、意外に使えない。犬の散歩ばかり。それからあそこは犯罪があっても、目撃者が出てこない場所なんです。あのテラスにおりたら、「あっ、まちと川が離れているな」というのがわかっちゃうわけ。そういうテラスができていうことが不思議でしょうがない。

しかも、川沿いの交番がみんななくなっちゃったんです。今までの大きな水害とか、地震とかで決め手になったのは橋詰の交番なんです。出る人も入る人もここでコントロールするんです。それがいなくなったら、混乱するだけじゃないですか。それからふだんのときもそれを見守る人がいない。

まちの変化というのがこんなに劇的に変化してくると、やっぱり川のほうも評価が同じだというのは変ですよ。

【岸井】 評価をもう少し長い目でやったほうがい

いのではないかという気持ちは、私も賛成です。20年の歴史も最初のころは、バブルの残り香のころでしょう。公共投資基本計画を背景にどんとやらなきゃいけないと言って、あれやこれやとみんな工夫していたころです。そのころは、言っちゃ悪いけどやや余計なものもつくっていますよね。その反省もあって、景観にしたって過度に何かやればいいものじゃないという考え方が大分浸透してきたと思います。そういうのは少しずつ時間かけて波があって収斂してくるので、短時間で評価するのはどうかな、という気がしますね。長い時間で見てやったほうがいい。ただ、事業者としてはB/Cとか、そういう話でしょうから、ちょっと困る。

【関】 今まさにおっしゃった川にかかわるものを評価していくときに、今使われているB/Cは河川持つ特性を十分表現出来ているのだろうかと感じています。なぜかという、現在用いられているB/Cは50年から60年を対象としています。BもCも、50年、あるいは60年から先は似たようなものになり、結果としてB、Cの比較に意味がなくなってくるのが大きな理由のようです。

50年とか60年のもっと先を含めて評価をする考え方、方法論が求められていると思います。堤防なり川というものがどういう機能を発揮しているかと言った時に、その対象となる期間は100年、200年、ひょっとしたら1000年なんです。今、その特性を十分表現する方法がない。耐用年数を延ばしていくと、B/Cの評価も変化する可能性がある。河川のように極めて長期にわたって効用を発揮するものは、それに合った評価をさらに工夫していく必要があると考えています。

【児玉】 かわまちづくりの分野でも経済評価をどうしようかと、何か評価をしないといけないというので我々ちゃんと考えろということをしているところから言われています。

【関】 自然環境にも様々な姿があり、時間とともに変化しているわけです。例えば神田川を歩いていますと、三面張りの川の川沿いにコンクリートの廃材なんかで洲ができています。そこにまたコサギがいたりして、これもすごい自然だなと思いがら歩いています。

【堂本】 時間の経過でそういう空間ができちゃいますよね。その時は自然的な価値がないけれども、それが10年、20年経過していく中でそれをどう評価するのと言ったときに、なかなかそういう共通の答えというのは持っていないですよ。ただ、失った自然環境を思えば、その時、その時は、三面護岸を取っ払ったほうがよっぽどいいですよという話をし

ます。

いろいろな川ありますけれども、時間をかけて見ていけば、比べる対象にもよりますが、評価できてくる部分もあると思いますし、常に幾つかのサイクルで、あのかの時の評価は正しかったのかというのは振り返ってみる必要があると思います。



堂本 埼玉県生態系保護協会事務局長

例えば、当面必要な空間というのは何なのと言ったときに、今の大人にとって必要な空間、次の世代の子どもたち、あるいは将来世代の人たちにとって必要な空間というのをちゃんと整理して、自然環境なりまちづくりなりを見ていかないと、目の前の利害関係で話しちゃいますよね。例えば、ふるさとの川整備とか、いろいろなまちづくりの話になったときに、10年前、20年前の検討会とか委員会に地元の自治会の代表の方が出てきて、それはほんとうに地元の自治会の声を代表していたのか、ほんとうに委員として参加して責任持った発言だったのか。そういうものを1回再評価してもらいたい。その当時の人たちの思いというのは、果たしてほんとうによかったのか悪かったのか地域の声を反映していたのかどうかも含めて見ていくと、随分評価の仕方って違うんじゃないかなという感じがするんです。

【宮村】 僕はあえて反対のことを言うと、将来のことと言ったって、何が必要になるかわからないんだからそれこそ余計なお世話だとも言えます。子どもたちには、次の時代に探せということだけをちゃんと伝えるということで、今いる人が今いるという形で楽しめばいいじゃないか。今いる人も楽しめないようなのが次の世代で楽しめるわけないだろう。全部が次の世代にというのは、それはちょっと行き過ぎなのかもしれないけど、自分たちが楽しみたいんだと言ってくれればいいわけでしょう。だから、死んじゃったら、もう別だよという感じ。

【堂本】 楽しみを後に考える余裕を残してもらいたいというところがあるんですけどね。あと、僕は20年前ぐらいから県内でいろいろな検討会の委員とかやっているんですけども、それが今の時期になってちょっと計画を変えて動き出したりとかあるんですが、当時の議論があまり顧みられずにやっているというのは一体何だろうと思うんです。例えば、リバフロさんとして当時企画、検討したことがその提案したとおりに受け入れられているのかどうかとい

う確認は、責務としてあるんじゃないかと思います。かなり河川のそういう部分でリバフロさんが引っ張ってきたわけです。それだけにもう1回整理して、総括して、次のステップにつなげるというのはもっとあっていいのかな。

【宮村】 それは僕もぜひやってほしいと思う。リバフロは行政じゃないというのが一つのいい点。これは行政ではいけないかもしれないけれども、うまくいかなかったと平気で言える度量があったっていいと思う。間違えたことを間違えたと言うことを恐れることはない、というムードが世の中に必要です。失敗したり、もともと評価が間違っていたというのがあったっていいんですよ。だってみんな人間、そういうものですよ。

ただ、そのときに、昔のことをちっともトレースしていない。例えば、明治以降、少なくとも第二次大戦後の水の議論なんて今やっていることをほとんどやっていますよ。でも、それをやらないから、いつも新しいことになって出てくるんです。これはばかばかしいんですよ。1回これはきっちり第二次大戦後の水の議論はどうだったのかということをやちゃんとやるのが川のプロとしての基盤になると思います。時代が変わっても、人間の知恵はそんなに進んでいないから、前のことを勉強することはいいことですよ。

日本橋は課題が凝縮、次の時代の大きなテーマ

【関】 今後の川とまちづくりに向けてという意味で岸井先生に日本橋川の再生についてお伺いしたい。日本橋川の再生の議論には大きな社会的関心もよせられました。できたら大変すばらしいと思います。日本橋川の再生の議論を川とまちづくりという観点でどんなふうに見ておられるのかお伺いしたい。

【岸井】 正直申し上げて、首都高のリニューアルというのはあそこだけじゃないですよ。ただ、場所が場所だけに脚光を浴びている。お金の面からいうと、やる気になればやれない感じじゃないが、今の時期にあそこに何でそんなに金をかけるのかという議論になると、いろいろ異論もある。従って、やっぱり周りの人たちがちゃんと準備と負担をして、それで首都高としても応分の負担をして、皆でやるというような仕掛けじゃないと、なかなかうまく乗れませんよね。というところで、今はいわば地元の動き待ちという感じではないでしょうか。地元が首都高を地下に受け入れるような環境をまずつくることによって、実は安くでき上がるというシナリオを

あのとき書いています。

ただ、私は首都高をどけただけじゃ何の意味もないのではないかと考えています。どけるだけであの水面を見てもあれがいいとは思えないし、結局はだれも水辺なんか行きやしない。もしやるとすれば、大手町から日銀、そして東証という、新しい日本の経済の深みを増す魅力的な地域を本気で創り上げるということで、様々な関係者がいろいろな方面で総力を挙げて一生懸命やるならば意味もあります。

【児玉】 どけると、少なくとも見えるようになるので、そこできつといろいろな人がいろいろなことをやらないといけないという動きの最初の一步にはなるんじゃないでしょうか。今はあんなところにあんなものがあることすら知らないの、だれも何とかしようとしなくてすけれども、見えるようになったら、何とかしようかということになる。

【岸井】 ただ、水面を見せるだけだったら、ほかだってあるわけですよ。何で日本橋だけやらなきゃいかんか。今のところは周りが騒いでいるからだけど、騒いだらやるというのもおかしな話です。あそこをちゃんとやるのがオール東京都とオールジャパンで意味があるという論理にしないといけないのではないかと思います。

【宮村】 逆に川のほうで何も出せないとしたら、やっぱり川からのまちづくりというのは大してないんですよ。だからそこをあえて出すべきです。

【岸井】 このチャンスにまちづくりと水の関係をもう一度ちゃんとやりましょうという、そういう玉としては非常にいいと思います。それをみんなの合意にしてお金をつけるということにするためには、もうひとつ工夫があったほうがいい。

【宮村】 少なくとも、とにかく川としては一つのきっかけだから。逆に言ったら、それを使いながら全国発信もしていけるという、何かテストとしてのアイデアを出すべきだと思いますね。

でも、都市を実際にやっている方がうちへ来て、日本橋川の特徴を生かしてという話はほんとうに日本橋川を生かしてって言えるのかって。結構わかり



大空を取り戻した日本橋地域の将来図

出典：日本橋川に空を取り戻す会HP

にくいでしょう。日本橋というのは、人が入ってくるところで、出るところとして使ってきたことがないんですよ。それを使うためにあそこに船着場をつくりたいと言うけど、それで経営が成り立つわけない。だけど、日本橋からディズニーランドに行かそうと思うからいけないので、ディズニーランドの人を日本橋に来させればいいんですよ。それは夕方1隻でも2隻でもいいんです。少なくとも満員になるでしょう。ディズニーランドに行った人は、その中で時間調整できるんですから、あの船に乗っていきこうと思えば乗るんですよ。日本橋に行くと言えば。

【岸井】 首都高を外すだけの話だとだめだというのが私の意見で、あの地域をどうするかという議論にして、そのときに水は大変大事だというのはそのとおりですね。日本橋の首都高が問題じゃない。実は日本橋川の問題なのです。ぜひ本気で川を何とかするという知恵出しをすべきだ。それが現実になってくると、より大きな力が働く。そういう気がします。

【関】 次の時代に向けての大きなテーマ、課題が凝縮している。しかも、解き方をどう解いていくかということも問われている。

【岸井】 東京都心は今までは南北方向の通りが中心なのですが、東西方向に広がりをつくることのできるのはあそこなのですよ。それはまさしく大手町-日銀-東証といった東京の金融センターを全部つなぐ話で、日本橋川を再生することによって今までと違う空間的にも魅力にあふれた、人が集う、インターナショナルな金融センターとしての厚みを持つことができる、これは将来の日本にとって非常に大事なことだろうと思います。

リバーフロントの範囲はどんどん延ばしていく

【宮村】 僕はそれこそ20年前、できるだけ水の面に視線を移して見てよと言っていた。見なきゃ我々失敗するよ、とにかく川の上に乗ろうよ。というのと、眺望というのかな、少し高いところから見るという両方をやってきた。どこまでがリバーフロントなのというのは議論してくれてもいいような気がする。リバーフロントという付加価値があるのかわからない。

少なくとも川というのはフロントとして経済価値を持っているかどうかというのをちょっと計算してみたらいい。僕がやってみたのは、少なくとも1キロ範囲。最初500メートルぐらいかなと思ったけど、川に行くと言ったら15分ぐらいは歩くだろうということで1キロぐらいということ、なかなかないですね。雰囲気もない。まちを歩いていて、川に近づくとい

う雰囲気はどこにもないですよ。

【水野】 川が見えるエリアのところに関しては、川づくりが緑になって歩けるようになったら、マンションの売れ行きがよくなったというのはよく聞きますけど。

【宮村】 不動産屋に値段を聞いていくと、少なくとも隅田川の周りでは出てこなかったね。そのうちに何階以上はフロントじゃないというのが出てきた。それは真上から見たら、そんなの眺望とは言えない。そうすると、リバーフロントとしては川からどのぐらいまでを対象にして、川とまちづくりという話ができるのだろうと思う。線だけでやっていると、いつまでたっても川とまちづくりは無理してこじつけているような感じじゃない。

【水野】 距離感だけで言うと、最近、事業を事後評価するので、そのときにアンケート調査をして、大体川から何メートルぐらいに住んでいる方によって希望価格に差があるかというのを1回調べたんですけども、1キロか2キロぐらいだったような気がしますね。



水野太田川河川事務所長

【宮村】 経済指標のほうがこうなんだよというのが出ていないとフロントにならない。まちづくりという形を入れようと思うと、少なくとも川沿いはどのぐらいを対象にしているという議論はあってもいい。

【岸井】 少なくともこれまでの汚れていたときの川は全く価値がないとみんな思っていたわけですから、まず水をきれいにしなきゃいけない。しかも、親水性が高いような形になってきて、はじめて価値が市場に反映されてゆくんだと思いますね。

【宮村】 僕は何でそういうことを言うかという、近代化してくると日常的には遠くへあまり行かないんです。前は川へ来る範囲が広がったんです。今、地下鉄を幾つも乗って行こうなんて気にならないですよ。行動半径が狭くなっちゃっている。そういう面で川から見たまちと言ったときに、どのぐらいのということを入れておいたほうがいい。

【水野】 太田川のある広島市街地は、少し歩けばすぐ川にたどり着くので、まさしく川とまちという一体感があるんです。それに、不幸なことというか、幸いなことに高潮堤防がほとんどまだできていない。伊勢湾台風相当の対応が全然でき上がっていない

状況なので、さっき言った高い壁がないんですね。川がすぐ見えるんですね。だから隅田川と太田川という状況は全然違って、今話を聞いていると、ああならなくてよかったなという思いもあります。

【宮村】 水面積は都市の中で一番多いんですよ。広島はそういう面ではいい。僕は高潮対策のための築堤はやらないほうがいいと思う。高潮には、水門でとめるという概念がないんですよ。文章が残っているかどうかがよくわからないんですけども、少なくとも言葉で聞いたのは、1970年代には隅田川を防潮堤でやるか、水門でやるか議論しているんです。そのときは軟弱地盤でさすがにダメだということだったんですが、今は技術が向上し、軟弱地盤の問題がなくなっているはずなんですね。そういう意味で言ったら、経済的にも隅田川に橋をもう1橋ほしいし、多目的にして入り口でとめるべきですよ。

【関】 IPCCでは地球温暖化により、今後海面がケースによっては59センチ上昇すると予測しています。オランダではもう既に50センチ上昇を見込んだ河川の計画をもちこれに基づき事業を進めていて、さらに新たな59センチにどう対処しようかという段階と聞いています。日本でも、東京湾、伊勢湾等の計画を見直さないといけなくなる。高潮も含めてですね。それをチャンスと見るのか、追い込まれてやると見るのか。今の宮村先生の話で言えば、線で守るのか、点で守るのか考えていかなければならない。

気をつけなくてはいけないのは、対策が遅れ、どうしようもなくなってからだと手段に限られてしまうということです。海面上昇に対応するには、どんな方法論や手段、考え方があるのか、今から取りかからなくてはならないということです。なぜなら、対応にはとても長い時間を要するからです。特に、まちづくりと関係する対応はすごく時間がかかります。そういう意味で日本橋川の話にさっきからこだわっているのは、今からいろいろなことを考えていく、チェックしておくことが必要だと思うからです。ひょっとしたら、東京の真ん中にレイクタウンをつくることだって考えておくことが必要だと思います。

【宮村】 それはかなりあり得るでしょう。東京は、まだ運河網がいっぱい残っていますし。やっぱり普段からそんなことを考えて議論しておいて、激特をもらうならいいけれども、いきなり激特から出発すると（笑）。

【岸井】 都市側からいうと、大体これまでの都市防災は関東大震災後の火事から発想してきたのです、基本的に。従って、この間も江戸川区で議論し

たのですが、実は水の対応にはなっていないのですね。水を考えて、江戸川区の中でも高いところに市街地をつくらなきゃいけない、いわばスーパー堤防的なものを順番につくっていかなきゃいけない。今までだと、そんな議論全くなかったのだけど、現場でもやらなきゃだめかなという話になってきていますね。守るところを決めてじわりじわりとでもやらざるを得ない。

【堂本】 ここ20年間ってある程度人口増加ということの前提で来たけれども、今後は人口が減っていくわけですね。東京のある部分は増えるかも知れませんが、圧倒的に地方のほうは人口が減少していく。そうした時にリバプロとして、この先10年、20年を考えたまちづくり、にぎわいづくりみたいなものをもっと考えて行くべきだと思いますね。

【宮村】 チャンスですよ。今までは、土地利用が高度化するというところだけを前提にしてきましたが、今度は土地が流域全体でいったら非常に緩やかになってきたので、今までの治水の手段をいろいろな意味で思い切って、出せるわけじゃないですか。川って後始末ばかりやってきたわけでしょう。だからそういう意味ではリバプロも、ものすごいチャンスが来たと思ってほしいですね。それで僕はどこまでというのを気にしていて、場合によっては流域全部やったほうがいい。フロントはどんどん伸ばしていくんだという、そういう感じで受けとめていますね。

土地利用と治水、まちづくり

【岸井】 前に、関さんにもお話ししたことがあるのですが、これからは市街地をスマートにシュリンクさせなきゃいけない。だから、どこをどうしていくかという議論を本気でやらなきゃいけないのですが、なかなか決め手がないわけです、正直言って。だから、川から捨てるべき地域を明確に言ってもらおうと、話は楽なのですけどね。

【関】 その話を伺いながら、あえて言わせていただければ、現実には結構高いハードルがあります。それは、現在の土地利用が大きく変わっていくのに要する時間の中で、現在を含め安全をどう確保していくかという点にあります。例えば、堤防やダムを整備することで安全度を上げていくことにこれまで以上に時間がかかるようになっていきます。予算がきわめて厳しい上に、近年発生した水害対策に予算を先取りしなくてはならないからです。特に、中小河川では、今まで上流や対岸と同じ安全度になるまで3年待ってください、5年待ってくださいと言ってい

たんですが、今はなかなか言えなくなっている。なぜかという、自治体を含め予算がないから河川改修等を中止してしまったところがあちこちであるからです。そうすると、地域ごとの安全度の差がこれまでは整備のスピードの差、時間の差だったので、安全度の差が固定化してしまう可能性があります。河川改修と併せて、まちづくりと川との関係で、地形等の自然条件から危険と評価される地域から安全な地域への移転という方法がありますが、移転への補償という予算か、個人の財産への新たな権利の制限が必要となります。これから、まちと川がいっしょになって取り組むテーマがこれから改めて大きな役割を持つてくると思います。そのときには単なる移転や補償でなく、自然豊かな居住空間としてまちを再生していくとか、人間の関与のほとんどない豊かな自然環境を有するエリアを再生していくというような骨太の話といっしょでないと川だけでは難しいと思います。まさに、まちと川が一緒になって取り組むテーマだと思います。

【宮村】 それは非常に大事で、どんどん極端に言えばいいと思っています。こんなところに住んでいるのが悪いとか、リスクをしょうのは当たり前だ。それを誰かが言ってくれたみたいなことではなく、いつも後始末だったからできなかったものを、線引きできるということなので、それはそこに住んでいる人にマイナスになるようなことはやらないのは当然なんです。

【関】 特にここ数年、激甚な水害の発生に対し、被災した市町村に土地利用の工夫をお願いをしています。何かというと、再度災害防止に向けた堤防やダム、遊水地の整備とあわせて、水害の危険度の高い区域をまちづくりの中で建築基準法に基づく災害危険区域を指定していただく。指定により家を建てない、あるいは建てる場合は地盤をあげるか、床を一定の高さ以上に上げてもらうかがねらいです。

最近一つ実現しました。平成17年の大水害を受け、宮崎市が建築基準法に基づく条例を制定し災害危険区域を指定しました。堤防ができたり、排水機場ができたからといっても安全度には限界があります。今まで毎年水ついてたのに、排水機場ができると四、五年に一度ぐらしか水がつかなくなる。そうすると、安全と見えるので住宅が一気に広がって、危険が内在する地域が増えてしまいます。だから地形的等から危ないところはあくまでも危ないということを明らかにしていく必要があります。これは、危険な地域に住んでおられる方々に対して、単に危ないと伝えるのではなくて、まちにとって、住む人にとってプラスになるような仕組みとか、組み立て

方なり、材料なりで考えていかなければならない。

【岸井】 今年から2年間かけて、都市計画の法律体系を新しい方向に向かわせるための検討が行われます。まさしく川の治水の考え方、それが200年とかで絶対安全と言っているレベルと、実際にはそこまではいかないわけだからある程度リスクを地域で背負わなければいけない、この辺ではリスクが大きいというものを共有して、それでまちの新しい姿を、そのリスクを避けながら整え直していく。そういう議論を本格的にやれそうな感じではあるんです。でも、そこがなかなか難しく、治水はやっぱり最後まで全部責任持って守りますって言うじゃないですか。

【宮村】 守りますと言っても僕はいいと思いますね。ただ、それは堤防でやると言ったら無理です。だから、そういう面では水田を使ったらいいと思いますよ。水田も3日水につかったらだめですし、水田そのままでは遊水効果なんてないんですよ。だけど、水田をピークカットできるような土地改良はできるんです。その時に、水田を使うのはソフトと思わないで、ハードと思えばいい。ただ、ネックになっているのは、治水が国交省で、農地は農水省だからというだけで、これを最初、北海道でやればよかった。

【堂本】 最近、農地の大規模化を図るので、休耕地の税優遇を認めないよう、徹底していくという方向が出ていて、農水省は、遊休農地を積極的になくしていくという方針ですよ。

【岸井】 農水省もお金がないので、投資する先を農振農用地の本当の農業適地だけに集中したいのです。これまでは人口が増加する中で、都市行政と農業行政はせめぎ合ってきた訳です。今、急に都市も農地もキュッと縮まったら、実は真ん中のところがあくんですね。そこで、この隙間を誰が管理するのだという話になってきていて、そこは先ほどのような話とうまくリンクできるといいのですけれどね。

【関】 もともと鶴見川の総合治水等からそういう考え方がありました。ほんとうにどこが危険なのか、どこが安全なのかという水害に対する危険性を踏まえた土地利用に誘導していったらということです。

それから、あたりまえのことですが、地形上、水につきやすいところはまず先に浸かりますし、他の高い場所よりは浸かる状況も悪い。その条件の悪いところをより安全にしていくことにより全体のレベルを上げて来ているとも言えます。一方、上流であふれていたものを溢れなくすれば、下流に負荷がかかる。そうすると、今まで安全だったところが場合によっては安全でなくなるんです。上下流のバラ

ンスを図りながら改修を進めるためには非常に時間がかからざるを得ない。そこをどうしていくかという議論をしたときに、中流部で土地利用を踏まえて輪中堤や二線堤等を工夫し最低限家屋等は守っていく方式が少しずつですが定着してきています。土地利用を踏まえた治水方式の導入で全体のバランスを取りながら治水安全度を上げていくといった忍耐強い議論が、ようやくできるようになってきたと思います。

【宮村】 農業用水の合理化事業というのは、ある面ではそういうことをやってきたわけですよ。だから、決め手は両方がプラスにならない限り、合理化事業はできない。水資源の合理化というのは、そういう面では農業用水の転用、これはきわめて技術的には参考になる。どちらかだけが有利だとかという話は絶対だめで、両方にとっていいというのを見つけて出すことが必要なんです。

【岸井】 河川はイチゼロじゃなくて、リスクを軽くするという別のツールを持っていると思います。そして平常時は、地球環境にやさしいとか地球環境を守るためにとかいう、そういう新しい少し違うファクターの位置づけをその中に与えてあげて、それを河川だけだということと難しいとすれば、みんなでそれを維持すればいい。

【関】 今までのハザードマップは各種の危険な情報をさらに包絡した情報になっていることで、極端に言えばゼロイチのハザードマップになっている。地域、区間ごとの危険度・安全度をもっと丁寧に表現できるように工夫



関治水課長

していく必要がある。そういう意味で典型的な事象として堤防の安全度・危険度を明らかにするため、点検をどんどん進めています。これまではどちらかということ、この区間の堤防は漏水のおそれがあり危険であるとういような具体的な情報はなかなか積極的に公表しにくい面がありました。むしろ、論点はどの程度危険なのか、そして何年で対応できるのかなどにシフトしていると思います。今、岸井さんがおっしゃったような、イチゼロじゃない安全度、危険度の議論が、まちづくりの中でもリンクできるようになってきた。

【岸井】 この間、たまたまJRの人たちと話ししていて、JRの人たちが鉄道林をもう一度ちゃんと管理しなきゃいけないと言っているのですね。鉄道

林って一時期、国鉄が民営化する時、管理にお金がかかるからと言ってかなり切り捨てたんです。結局、それが土砂災害だとか、そういう問題に全部響いてくるということで、もう一度その部分をしっかりやるべきなんじゃないかとなっている。ただし、それは昔全部直営でやっていたけれども、もうそれはできないので、ちょっと違う形でやらなきゃいけないのではないかな。そういう時代になっている。

【宮村】 逆に、水害防備林という名前で作っていたのを、一番やっていたのは国鉄ですから、営業に関係あるところはやっぱりシビアにやったんです。それがなくなってから、本当に突風では倒れるし、雪では吹きだまりになっちゃう。

さっきの話で、僕ちょっと、もし本当に水田をやるんだとしたら、農家にとってもすごくいいんですよ。乾田化するんです。だから米がだめになったら、次に何やるかって自由度が入ってくるんです。そうすると、今、畑が結構いいから、畑をやりたい人もやるし、米に戻りたい人もできる。ただ、そのときに湿地でなくなるんです。それは、それこそ堂本さんたちにとっては、水田が湿地だよと言うんだったらあれだけど、日本はずっと何とかして乾田化したいと思ってきたんですよ。

【堂本】 湿地環境として水田が調整機能を持つような構造であるべきと僕は思いますよね。人口が減っていく中で、食糧自給率の問題とか、いろいろあるわけじゃないですか。そうすると、もうちょっと総合的に考えていけば、落としどころもあると思います。

【関】 地形的にも、どう考えても低いところにある水田と、高い所と中間があるわけで、先ほど言われたようなその土地が持っている本来的な性格があるわけですよね。そこは一律の議論でなく、危険度の程度とか、状況に応じて自ずから整理されていくんじゃないですか。

【岸井】 多分、そういうのをどこか一例モデルをちゃんとつくってあげないといけない、口で言ってもなかなかどうやっていいかわからないですよ、正直言って。

スーパー堤防を進めるためには

【兎玉】 今スーパーが最初の10年に比べると、ちょっと前に進みにくい。こういう状況になっていますけれども、地元の市や町のお金の財政状況の影響というのもかなり大きいんじゃないかなと思います。

【関】 スーパー堤防はこれまで区画整理や再開発

等のまちづくりの動きと一っしょになって進めてきました。具体的なまちづくりの動きのあるところで進めてきたのですが、今後はそうした動きが必ずしもないところでどう進めていくか更に勉強していかなければ行けない時期になっています。現在、大和川の阪神高速と連携して進めている区間で二度の移転せずに進める方法を検討しております。抱えているいくつかの課題を解決できる可能性があり、今後の展開が開けてくるのではと期待をしています。

【水野】 地元では、区画整理、土地改良は駅前をやるので、川沿いは優先順位が落ちるんですよ。今動いている大和川とかは、阪高など別の事業絡みです。

【関】 スーパー堤防というのはまちづくりと一緒にないとなかなか進められない。多くの地権者、関係者の方の権利さらに相互の権利調整とか様々な要素を考慮したら、それは河川事業だけではまず無理ではないでしょうか。

【宮村】 河川なら河川の不得手なところがあって、再開発というのは不得手なんです。これは都市で言えば、コーディネーターがいるんじゃないですか。建築の一つの職種としてね。そういう人を育てていない。だから今、そういう人も育てていって、いろいろな意味でのコーディネーターをどうやってつくるかというのを本気でプロとしてつくらないといけない。NPOならという、そういう話じゃだめですね。

【関】 スーパー堤防が完成した地域では、まちが大きく変わります。でき上がったところではとても高い評価を頂いております。

つくる時代から管理する時代の川とまちづくり

【宮村】 関さんにお伺いしたいんですけど、お金がないから今何もできません。それはわかるんですよ。でも、お金があったら何したいんですか。それがなくてお金がないからできませんという議論はおかしいと思いますね。本来、ハードができないからソフトなんて言っていたのが、ソフトがメインになって、ソフトやっていたらいいようなことになってしまいます。

【関】 予算が減少した事を持って、負の連鎖に入ってしまうようにしなければならぬ。さらに、つくる時代から使いながらつくる時代が変わったということだと思っています。今までは、とにかくつくるで来たわけですが、すでに、新しい時代に入っているわけです。例えば昭和40年代、特に50年代につくった全国の排水機場やゲート8,000カ所が、近いう

ちに順次更新を迎えます。改築の時代に入ってくるのです。設備だけでなく、例えば、おっしゃっていた都市河川の三面張りも、部分的であっても順次に改築に入ってくるわけです。そうした機会をチャンスに変え、単に同じものをつくるのでない取組が大事になってきます。改築のときにどうするかという技術を開発して、それは一気に1kmもやる時代じゃなくて、100メートルずつで、それが何年かしたら心地いい空間がつながっているというものを今考えなきゃいけない。

【岸井】 そういう意味じゃ、日本橋は一つのモデル的なテーマを抱えているといえますね。公共施設の改築がまちづくりに及んでいます。

【関】 もう一つあるのは、予算がないからといって老朽化した施設に手を加えないわけにはいきません。壊れたら大変です。そうすると、財政が厳しくともやらないわけにはいかない。ということは、必ず改築更新がいや応なしに進んでいくので、そこはもう1回まちづくりとの関係において、本来機能とともに環境や景観もあわせてよりよいものにしていく方法論を考えていく必要があります。

【岸井】 他の分野の方にも言っているのですが、今までは早く多くの量をつくる必要があったから、単機能のものを粛々と整備するのが一番合理的だったのです。余計な調整なんかしていたら時間がかかってしょうがないから。しかし、更新する時期になったときにもまた同じことをやるのか。そうではなく、例えば日本橋川のように、首都高を変えるのに併せて周りのものも全部一度に考え直してみる、そういう時代なんじゃないかと思えます。個別施設の更新を契機に地域全体を構造的に見直す、単品の施設更新にとどまることなく、まちのあり方をもう一度考え直して、次の時代にふさわしい空間を皆で創造するというのであれば多くの人に受けとめられると思うのです。アメリカでも高速道路だけ改修するといったらみんな反対するけど、高速道路の再整備を契機に緑の街に変えると言ったら、人々はオーケーなのですね。ちゃんと次の時代の新しい施策にしなきゃいけない。

【関】 そのときに、必要なことがあって、まず先ほど堂本さんがおっしゃっていたこれまでの評価だと思います。10年前、20年前に取り組んだもの、例えばふるさとの川の初期の頃の取り組み、1期生、2期生なんか、今改めてすばらしいと感じるものと、やっぱり寂しいなというものがある。寂しく感じるというのは、そこに人がいなくなっているものや維持管理が不十分でむしろみすばらしく感じてしまうものがあります。あるいは自然環境を考えたときに、

失礼ながら、思った以上によくなったところもある。北海道の茂漁川の例です。河川改修でショートカットして、周りに土地が余り普通なら廃川処分されていたはずの土地を、もう一度川に戻したことにより本当に川らしい川づくりの成果を上げられた。これは、多自然型川づくりの成果だけでなく、土地、土地利用をどのように考えるかを含め、評価されるべきだと思います。そういう評価もあわせて、今いいものが何でいいのか、少しずつやり直すものが30年後にどういう洗礼を受けるかを考えるとき、いい物差し、評価軸になるんじゃないかと思えます。時代が変わり、人が少なくなり、高齢化してきた時に合わなくなるものもある。



茂漁川

出典：土木学会HP

【岸井】 先ほど、利水があって、治水があって、環境ニーズだという話がありました。ただ、利水は今の都市にとっては利水になっていない。つまり、農業用水、工業用水ではあったけど、今や社会の3分の2は三次産業なのです。そういう意味では、水をまちに活かすということが、次のテーマなんじゃないかと思えます。利水という意味は単に直接水を消費するという意味じゃない。例えばみんなが水に親しみ、水を楽しむことによって間接的に利を得るというような水の使い方や、地球環境問題、エネルギー問題のような局面で川の水を多様に活かすという使い方など、新しい水の活かし方を本気で考えるべき時代なんじゃないかと思えます。そのためにも特に下水とは必ず手を組まなきゃいけない。

【宮村】 それは今までやっていたのをやめちゃったんです。戦後、川の政策でやったきたものをもう1回振り返って議論してほしいと思いますね。昭和20年代、30年代、40年代までやってきたのに、もったいないですよ。時代によってとんでもない恵みがあって、例えば、第二次大戦中は帝都防空政策もあり、みんなが火災に備え用水おけというのがあった

んです。大体1トン以上入るんですが、それが水まきのもとになったり、側溝に流すようになっていて、ちょっとしたところに水があったんですが、全部壊してしまっただけで、それに代わるものがないと、まちの風景としては出てこない。岸井さんが言ったように、都市の中でも今まで失ってほしいものがないものはいっぱいありますよね。

【関】 下水と河川とは連携する以上に、水循環等に関わる新たな共通の目的を明らかにし、この目的達成のために役割を分担していくということだと考えています。日本橋の議論の中で、川を覆っている高架の高速道路を撤去して、さらに水質改善をして、日本橋川の水がすごくきれいになった絵を見たときに、委員でおられる経済界の方が「こんなふうになるんだったら、お金を出してもいいな」と言われたのがもの強く印象に残っています。今の岸井先生の話の話を伺っていても、やっぱりとことんやらないと……。

【岸井】 三島で工業用水に使っていた水をまち中に流してまちがまた復活しているでしょう。きれいな水を流すということがまちにとってすごく魅力的なことになってきている。ただ、新たに川の水を流させてくれるかということ、水利権の問題があるとか言われて簡単にできない。次の時代にとって必要な権利はもう一度ちゃんとつくればいいのかと思うのですよね。

【水野】 阪神・淡路大震災が起きたときに、神戸で本当に水がなくて初期消火ができなかった。このため、まちの中に水と緑の回廊をつくる阪神疎水構想が持ち上がりました。モデルケースとして下水道の処理水をまちの中のせせらぎ水路に流すことも行われています。しかしながら、流す水を淀川から持ってくる計画なので、施設整備にお金がかかるのと、淀川から水を取らせてもらえないということで構想がとまってしまった。

【関】 水は地域にとって限られた資源です。その資源を権利があるから、ないからということも大事ですが、限られた資源をどう社会的な合意を得て配分していくか、再配分していくかということが求められていると思います。

【堂本】 ちょっと前までは、わりに道路と公園と河川で連携事業を模索していたと思うんですけど、ああいうのというのは今どういう状況になっているんですか。

【関】 連携プロジェクトも、厳しい予算を受けて元気がなくなってきていると感じています。一緒にやろうとしても、予算が限られているのでちょっとというような雰囲気が広がっている感じです。連携

事業であるが故に進められる事業も多くあり、一層の工夫をし進めなくてはならないと思います。

【堂本】 ちゃんとネットワークして、人の交流とか、自然の交流も含めて質の高い空間をつくっていかうという時に、そういった省庁間の連携、あるいは省の中での連携事業というのがちゃんと進んでいかない限り、ほんとうにずっと夢を描いているだけの話かなと思います。

【関】 予算が厳しい今、一つだけすばらしい資源を安く使える。こう言うと先輩に怒られますけれども、退職された元気な実績十分の専門家が大量おられます。ただし、今活躍して頂く仕組みが必ずしも十分ではありません。もっとお願いするような仕組みを充実していく必要があります。

【宮村】 そのことに触れて言うと、僕はリバフロが率先してやったほうがいいと思うのは、やっぱり技術。これだけ仕事をやらないと河川技術はなくなってしまいます。新しいものに行くというのでもいいけれども、ちゃんとどこかが河川技術を伝承しないといけない。

【関】 もう一つは、最近多自然型川づくりの徹底的なレビューをしました。全国で、あるいは堂本さんもお存じの埼玉の事例等すばらしい実績がたくさん上がってきている。一方では、べからず集の事例も残念ながら多くあります。全体の平均をどう上げていくかが大きな課題です。今、「プラレール方式」の多自然川づくりの取り組みを支援する参考書というか、あえていえばマニュアルをまとめています。多自然型川づくりが始まった頃、マニュアルがあるからどこでもかしこでも同じ、画一的なものができるとの批判、反省から多自然型川づくりではマニュアルを控えたわけです。ある方によれば、マニュアルをやめたら、逆に何も考えなくなったともいえるそうです。そこで、「プラレール方式」は、川の勾配とか、規模とか、流量とか、河床材料とかに応じて、



多自然川づくりの例（埼玉県 黒目川）

例えばここではこういう手段、工法をとったほうが植生や昆虫、魚類等の生息環境に好ましいというように、考えそして選ぶための参考書を現場に送り、多自然川づくりの平均値を上げようという試みです。

さっきおっしゃったように、都市計画法の見直しというような議論の中でも、水辺などに関して今まで話してきたこんなことなどの検討や議論が必要ですね。

【岸井】 まさしく都市計画の分野でこれからやる所です。今は、人口減少や環境重視時代になって都市計画の体系をそろそろ抜本的に変えなきゃいけないという問題意識があるだけなのです。最終形のイメージはコンパクトシティ、公共交通を中心にしながら高齢者も歩いて暮らせる範囲ぐらいでまとまって生活できるような街、がいいのではないかと考えられている。その時に、新しい仕掛けが必要ならば、入れればいいですね。

【堂本】 逆にそういう地域とかまちを維持するには、隣組とか、そういったもう1回地域の自治会のあり方とか、集落単位なり、長屋の生活なり、そういうのを再度評価していかないと、実際には機能していかないですね。わりに川とまちづくりにかかわっている市民の人とか関係者の人というのは、結構そういう部分で近いところがあるんじゃないか。その辺を拾い上げていくというか、場をつくっていくというのもリバフロの一つの仕事としてあるのかなと思いますけどね。

僕らも、言っている本人が近所づき合いがなかったりしますからね。

【岸井】 今、地方でも郊外の住宅から都心のマンションに引っ越す方が多いのです。都心で気軽に生活できて楽しいやと思っているおじいちゃん、おばあちゃんも結構いるんですね。そういう人たちのサポートをするには、従来型の地縁システムだけでなく、企業型の契約でやっていくというシステムも要る。ただ、同時に地縁がなくなるわけでもなく、何かあったときは地域で避難し、支えあわなくちゃいけないので、両方要るんですね。

【宮村】 川の事務所というのは、それこそさっき言ったように、お金がなくなってくる。だんだん予算がなくなってくるのに、なぜ合併しないんですか。

【関】 河川の事務所について言えば、危機管理と日常管理の体制との関係でその位置や数が決まってくるものであって、建設の予算の規模と事務所の役

割は比例するのではないかと考えています。河川の管理の強化のなかで事務所の役割を見直していくことは大切だと考えております。

【岸井】 今、一生懸命基本方針を河川審議会で作っているじゃないですか。これからは整備計画ですね。どういうスケジュールになるのですか、全体的に言うと。

【関】 基本方針の策定は、7割から8割ぐらいになっていると思います。基本方針ができれば、整備計画を早いところでは半年、長くても2年ぐらいで策定してきています。課題はいろいろあると思いますが、その中の一つは整備計画にさらにリアリティーを持たせることが必要と感じています。整備計画で対象とする20年から30年は結構長い時間です。河川によっては工夫していますが、限られた資源をどこにさらにどのような優先順位で投入していくかが、予算が厳しければ厳しいほど大切になってきていると思います。

そのためには、どの地域、区間がどの程度安全で、危険かをもっと示していく必要がある。アダム・スミスじゃないんですが、安全度の予定調和をスタートにしてしまうと、どこが危ないか、どこに水がたまるのかわかりにくい。地域ごとの安全度には、おのずから差があるわけで、それをふまえた上での資源の配分が求められています。

もう一つは管理。できているんだから、できているものをどう機能を発揮させ、さらに持続させるかという議論を本気でしなくてはならない時間に既に入っています。

【児玉】 大変ありがとうございました。いろいろな意見をいただきまして、今後のリバフロの活動の方向をご示唆いただいたように思っております。今までリバフロがどれだけ貢献できたかということも検証しないといけないので



児玉研究第一部次長

すし、これから日本の川がよくなるために少しでも役立てるように引き続き努力していきたいと思っておりますので、また皆様方のご指導をよろしくお願いしたいと思います。本日はありがとうございました。